

遅すぎる年齢

坂田三允（長野県看護大学）

テレクラ、伝言ダイヤル、援助交際、薬物乱用——いま、子どもたちをとりまく環境は、古い時代に育った私たちの理解の範囲を越えて変化してきている。

思春期とは何かについて考える必要があって、参考書を捜して本屋をぶらぶらしていたときに、この本に出会った。『見失う親 消える子供たち』という副題のあるこの本は、アメリカと日本の子どもたちと、それを取り巻く人々のノンフィクションの物語である。

ここには、「性行為を売買するが、自らを売春婦とは思わず、薬はやるが麻薬常習者とは思わない」少女が幾人も登場するが、そのなかの1人、沙矢（仮名）にまつわる話を1つの軸にして、この物語は展開されてゆく。著者は沙矢と、1995年当時流行していた通称プラ・クラなる性産業の取材で知りあう。沙矢は、著者が知り合ったとき17歳、高校を中退して、プラ・クラでアルバイトをしていた。著者は沙矢が、金が欲しいことは正直に隠さないが、一方で彼女が求めているのは金以外の何か、別の何ものであることに興味を引かれ、取材を続けてゆく決意をする。

沙矢は自分を決して普通じゃないと位置づけているが、ここに登場する少女たちのほとんどは、「自分は普通の家庭に育った普通の女の子であること。（中略）親は何も知らないか、知っていても何も言わない。自分もいつまでもこんな生活は続けられないと思っていること、高校を出たら、専門学校へいくか1年間は“普通”の

会社に勤めて、それからやめて、もう少し収入がいいところに替わろうと思っていること」を語る。しかし29歳の風俗店店長は、そういう子たちを食物にしていることを自覚したうえでいう。「14歳で変わって、15歳でこういう世界に飛び込んでくる」。そして、14歳とは「遅すぎる年齢ですね。とりかえしのつかない年齢。（中略）生まれ落ちてから14年たってるでしょう。もう手のつけようがない」と。

「自分は誰か？」という問いを続けつつ、移りゆく意味にいちいち適応しなくてはならない季節」である思春期に、溢れる情報のなかで、リアリティのない世界を見てわかったかのように思ってしまうことに慣らされて、自分を見つけれない子どもたち。でも、自分を見失っているのは、大人も同じなのかもしれない。子どもに行く手を示せない親たち。それが、私たち大人の世代なのでもあろう。私たちは、まずそのことを認めるべきなのだ。

サンフランシスコでストリート・サバイバーと呼ばれる子どもたちに啓蒙活動をしているロジャーはいう。「人間が人間を改心させて完璧な人物にするなんて無理なことだ。（中略）売春でしか稼げないのなら、まずその仕事を安全なものに切り替えさせることだ」、「世の中には悲劇が満ち溢れている。絶望しちまおうと思えば簡単だ。薬に流れ、生命を縮める。（中略）けれども希望はあるんだ」と。そして沙矢は「（合法的な風俗業界で）玄人になる」と宣言し、それに向かって歩いている。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科部長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。